

aoca  
2026.01

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

no.  
103



## 目次

- ・ごあいさつ ————— 1  
東條隆郎 (会長)
- ・OPINIONS: 共鳴 [9]  
人間の生存に欠かせない脳機能領域  
「美の認知」 ————— 2-3  
中野信子 (脳科学者)
- ・素材を知る [6] 漆  
うるわしのちから ————— 4-5  
齋藤潮美 (漆装飾研究者・個人会員)
- ・パーセントフォーアートを知ろう [3]  
韓国における「建築物美術作品制度」の  
変遷と展望 ————— 6-7  
関鎖京 (北海道教育大学岩見沢校芸術文化政策研究室准教授)
- ・2025年度 第37回設立記念総会・  
AACA賞2025表彰式 ————— 8  
[総務委員会] 小谷純造 (委員長)
- ・AACA賞2025 (第35回): 公開・最終審査会 ————— 9  
[表彰委員会] 可児才介 (委員長)
- ・第16回aacaサロン:  
サウンドスケープ・デザイン —風景に耳を開く— ————— 10  
[会員増強委員会] 石原智也 (副委員長)
- ・2025年aaca夏季交流会 ————— 11  
[総務委員会] 中野恵美子 (委員)
- ・第210回aacaフォーラム:Aalto talks in JAPAN  
アルヴァ、アイノ、エリッサ・アアルト:  
建築とデザインにおける人間的アプローチ ————— 12-13  
[フォーラム委員会] 萩尾昌則 (委員長)
- ・地域創生Vol.3 3連続講演会 ————— 14-15  
[文化事業委員会] 木村慶太 (委員長)
- ・第2回AACA賞受賞作品視察会2025:  
ポーラ青山ビルディング/土浦亀城邸 ————— 16  
[会員交流委員会] 大草徹也 (担当理事)
- ・建築美術工芸・よもやま話 [4]  
魅力あるaacaになるには? ————— 17  
会員H & 会員K & 会員T
- ・私が思うaaca的空間 ————— 18  
◎南禅寺水路閣  
尾崎勝 (建築家・個人会員)  
◎フレスコ画のある空間  
大野彩 (フレスコ画家・個人会員)



文化芸術推進基本計画(第2期)の前文では「文化芸術は、人々の創造性を育み、豊かな人間性を涵養するとともに、人と人との心のつながりを強め、心豊かで多様性と活力のある社会を形成する源泉となるものである。また、地域社会の基盤を形成し、人々の生活の礎となり、彩りと潤いを与えるものとして、洋の東西を問わず、人類にとって必要不可欠なものであり続けている」と文化芸術の価値について記述されています。

aacaでは、様々なジャンルがある「文化芸術」の中で豊かで美しい空間創りにかかわる人々が集い、個々人の活動とは別に、団体として、人々が「芸術文化」の価値を体験できる環境づくりとその広がりを目指し活動を続けています。

その活動の柱の一つとして協会賞の表彰があります。aacaが設立されてから初めての第1回AACA賞1991では、AACA賞として「東京都多摩動物公園昆虫生態園昆虫ホール」、特別賞として「兼六園周辺文化ゾーン」が選出されています。第35回目となる昨年のAACA賞2025では、AACA賞の「小豆島 The GATE LOUNGE」、美術工芸賞の「荏原 畠山美術館」「会津柳津駅舎情報発信交流施設」の他、優秀賞・奨励賞・入選を合わせ19作品が選出されました。毎年北海道から沖縄まで全国各地域の数多くの作品の応募があり、その中から「様々な分野が協力し、融合して創造された文化的環境と美しい芸術的景観を対象として、これらを実現させた作品」を選出し、現在まで、表彰数は207作品となっています。このように優れた文化芸術的環境を表彰し、その情報を広く社会に発信しています。誰もが自然に分け隔てなく「芸術文化」の価値を体験し触れ合えること、とくにパブリックな空間において優れた「芸術文化」の価値体験が自然に享受できることを期待するとともに、周囲の環境や景観へも波及することも併せて期待しています。

また、aacaではこれまで5年にわたりVol.1-Vol.3と3回に分け「地域創生」に関する講演会を開催してきました。Vol.1では「兵庫県丹波篠山市・福井県坂井市三国町・山形県最上郡金山町」、Vol.2では「島根県太田市大森町(石見銀山)・愛媛県大洲市・秋田県上小阿仁村・京都府木津川市」、Vol.3では「千葉県流山市・島根県隠岐諸島・群馬県中之条町・群馬県パーセントフォーアート条例」を取り上げ、それぞれの地域が長年培った、自然・歴史・文化を掘り起こし、それらを生かした街づくり・地域づくりをお話いただきました。

この連続講演会を通じて得られたことは、それぞれの地域には長い年月をかけて培われ、育まれてきた固有の資産があ

るということ。それは自然や景観と人との関係や人と人とのつながり、あるいはその地域が長い時間をかけて築き上げてきた文化・産業など、有形・無形のものとして必ず存在しているということ。その潜在力を引き出し地域の価値を高めている点において、秋田県上小阿仁村や京都府木津川市、群馬県中之条町では鋭敏な感覚を持つアーティストが参加することで地域や人々の潜在力を引き出し、地域に活力を与えているという事でした。また、昨年の11月に開催された最後の連続講演会では、群馬県から「群馬県パーセントフォーアート条例」の目的について、「アートが持つ様々な力を活用して、人々を惹きつける求心力を持つ群馬県の実現と県民の幸福度の向上を図ること」であるとお話をいただきました。

現在aacaでは「パーセントフォーアート」推進の活動を続けています。群馬県の実現的な取り組みを他の自治体にも広げていくことや法制化にむけた活動を進めていきたいと考えています。

これからも会員の皆様方とともに「芸術文化」の価値を体験できる環境づくりとその広がりを目指し活動を続けていきたいと思っています。



AACA賞2025(第35回)表彰式



地域創生Vol.3 講演会

## 人間の生存に欠かせない脳機能領域「美の認知」

中野信子 脳科学者

今回お話を伺うのは脳科学者・中野信子氏。

自然科学では通常は用いることがない言葉「共鳴」を、当記事の文脈から改めて解釈したうえで論じていただきました。

※英語で「Resonance」にあたる「共鳴」は、自然科学の領域では通常「共振」として訳されることから、MRI (Magnetic Resonance Imaging) など測定のジャンルの言葉とされ、情緒的文脈を有する「共鳴」を使うことはないそうです。

### 異分野(背景)が引き起こし得るものは

今回は「共鳴」というキーワードを「異分野、あるいはバックグラウンドの異なる専門家が同じプロジェクトにかかわることで相互作用が起ること」と定義づけしてお話したいと思います。

「共鳴」には望ましい相互作用が起きる場合とコンフリクト(対立状態)が起る場合があります。望ましい相互作用は、相手に対してリスペクトがあると起こりやすくなります。一致したところがある、相手の仕事やステイタスを知っていて軽々に見下すことが生じにくい、大きな問題が起こっていないなどが前提となると、互いの良いところを生かして仕事がしやすい状況が生じることは集団の心理学でも既にわかっています。

一方、共通するバックグラウンドがないと集団バイアス(異質なものを排除したいという圧力)が起こりやすく、「こんなこともわからないのか」とコンフリクトが生じてしまう場合があります。ですから異分野の人を混ぜるのが常にいい結果につながるとは限りません。

集団バイアスはなかなか厄介なものです。私たちはインターフェイスを通じてしか中身を理解し得ないために、外見で物事を判断してしまうことが往々にして起こります。たとえば私が白髪で背が高い70代の男性のような容姿をしていたら、今の私と同じことを言っても捉え方は大きく変わるはずです。こういうことがバックグラウンドの異なる人間同士のコミュニケーションでは特に起こりやすくなるのです。

### 望ましい相互作用としての「共鳴」のために

ですから異分野の人同士のやりとりが行われる場合には、目に見えやすい、わかりやすい手掛かりとなるものを整える必要があります。

たとえば仕事で評価されることは当たり前のことですが、それ以前に「～らしい格好」をすることが挙げられます。建築家の方であればスタンドカラーとか黒とか白とかを着る方が多いとか。「～らしい格好」をしていると能力に信頼がおけるとみなされやすいので、以外とコンフリクトを生まずに済みやすいところがあります。言い換えれば、それらしい格好を求められている、あるいは才能にふさわしい恰好をするという何らかの圧があるからだとも言えます。インターフェイスが機能していな

いと、本来の真価が評価してもらえないということが起こるわけです。

こうやって口に出すと「なんだ、こんなことか」と思われるようなことかもしれませんが、意外と見過ごされがちな点ではないかと思います。

私たちは自分で思っているよりずっと、見慣れない情報や慣れていない考えを受け入れるには高いハードルを設けています。実際、新しい考え方や自分と違うものの見方を、大多数の人は自然には受け入れられません。しかし、違う集団に属している人、あるいは違うバックボーンを持つ人の間に「共鳴」が生じるためには、お互いに認め合わなければなりません。では「認め合う」という望ましい結果を誘導するにはどうしたらいいのか、何を触媒としたらいいのでしょうか。

### 自分と違うものを美しいと思える脳機能とは

そこで重要になってくるのが自分と違うものを美しいと思える「美の認知」です。この認知機能があるがゆえに私たちは自分と違うものを美しいと思えることができ、認め合うことができるのです。逆にこの機能がないと自分と違うものに出会うとぶつかり、敵対してしまうことになります。勝つか負けるかというみの関係にしかなくなるわけです。

「美の認知」という脳機能領域があることは、ホモ属という進化の過程にあるカテゴリーのうちで、私たちホモ・サピエンス・サピエンスのみが生き伸びてこられた大きな理由のひとつだと考えられます。

脳の構造として簡単に説明すると、「美の認知」には前頭前野のほとんどすべての領域が使われています。前頭前野は人間の脳の際立った特徴である大きく膨らんだ前頭葉の前半分にあたる場所で細かく機能分化しています。「美しい」「感動する」「共感する」、あるいは、「してはいけない」「相手に配慮して言わない」といった抑制や、倫理など、行動の制御を担います。さらに右側の側頭頭頂接合部(TPJ)は時間や空間、さらに道具の認知や暗喩の理解などを担うと考えられています。

これらは特に空間のデザインをする場合にはものすごく使うはずの場所で、大きさには多少の差異はあるものの、30歳くらいまで徐々に成長していくとされています。

### 「美の認知」がもたらすものとは

では「美の認知」がなぜ生き延びるために重要なのでしょうか。身体がとても弱い人間は、筋力も弱くて戦えない、走っても勝てません。しかも外甲殻がないので柔らかくて美味しい。特に子どもは子どもが次の子どもを産むまでには十何年もかかり、育てるにも教育にも莫大な能力がかかります。それほど



脆弱な生物なのに、地球上の哺乳類の9割は私たち人間とその家畜です。ではなぜこれほど繁殖できたのか。その答えは、集団をつくる能力にありました。

個々がどんなに弱くとも集団をつくって分業し、それぞれが「戦う」「武器をつくる」「子どもを産む」「育てる」など違う役割を担ってあたかも疑似的な一つの生命体であるかのようにまとめあげること、ほとんどの野生の動物に勝てる能力を得たのです。このように集団をつくる能力が私たちの武器だったと考えると、これだけ脳の前頭葉が大きいことにも理由がつけられます。

集団をつくることは努力すればできるというものではありません。他人に対して「この人ステキだな」「この人の見方は面白いな」「この人からもっと学びたい」など、プラスの何かがあると見えなければ集団は成立しないからです。そのプラスの共感を生じさせる懸け橋として大きな役割を果たしているのが美を認知する能力なのです。

#### 現代アートの鑑賞を脳科学の視点から捉えよう

この領域を鍛えるために非常に良いと考えられるのが現代アートの鑑賞です。物事を立体的に捉える訓練にもなりますし、教育としても大いに価値があると考えられるからです。

異分野の方、自分と違う面を持った人の見方を見ると、自分の視点からは見えないものを誰か違う人から光を当てるとこういう風に見えるのだと知ることができます。「自分と違うやり方で世界を見ている人がいる」と知るためにも、時間認知や空間認知を鍛えることにも役立っていくと考えられます。あらゆる人にとって意味があると思いますし、特に建築系の学生にとっては、現代アートの鑑賞はかなりいい方法なのではないかと思います。

ここで現代アートと限ってお話しているのは、無条件に美しい・珍しいと思える近代以前のアートに対し、現代アートにはむしろそれらの基準を揺さぶるようなものが評価される面があるからです。ある種の現代建築でも同様ですが、時には美しいと言えないものでも非常に刺激が強く興味深いものの方が「強度が高い」という言い方で評価されることもあります。そのために現代アートの鑑賞では「美の認知」に加えて前出のTPJなど別の脳機能領域も使うことになり、たとえば倫理と一緒の領域で処理されているだろうと言われています。エシカルなことや哲学と結びつきやすいのもそのせいかもしれません。

#### より豊かに生き延びるために「美」と「共鳴」を

もちろん、アートは明日生きていくためには必要ないかもしれませんが。現に高校教育で美術はマイナー科目ですし、そもそも

社会通念として「美術なんて裕福な人に許された贅沢で明日には役に立たない」と思われています。

しかし、それならなぜ私たちの脳はこんなに広い領域を美の認証に使うのでしょうか。脳はその維持にもものすごくコストがかかるもので、無駄な機能を持つ余裕も、無駄な使い方をする余裕もまったくありません。ということは、無駄ではないはずなのです。

よく「現代美術はよくわからない」「理解できない」という方がいますが、それはそれでいい、そこで無意識のうちにどうふるまっているか、どう認知が変わるのが重要なのですから。たとえば富士山のように自分が抗いようのない大きなものを見た時に人間の認知が大きく変わることが研究からわかっています。同様に公共のアートや大きな建築などにもそういう役割があるように思えますし、携わる方には自分の作ったものが人に行動変容を起こしているということに意識的であってほしいし、誇らしい仕事だとして自身をリスペクトしてほしいと思います。

生き延びるということは、要は大きな衝突をどうやって回避するか、他の人と適切な刺激を与えあいながらどれだけ豊かに楽しく生きるか、安全に生きるかということであって、IQの競争でもなければ、SNSで人からどれだけ評価されているかということではありません。本質的に私たちがフォーカスすべき能力は、もっと「共鳴」を目指した方向にあると思います。自分と違う人からどれだけ学べるか、自分と違う人にどれだけ豊かなものを渡せるか、そうすることによってお互いに満足してより豊かでより多くのものを得た実感や充実感とともに私たちは生きていけるのではないのでしょうか。



中野 信子 (なかの のぶこ)

脳科学者 / 医学博士 / 認知科学者

東日本国際大学教授 / 京都芸術大学客員教授 / 森美術館理事

1998年東京大学工学部応用化学科卒業。2008年東京大学大学院医学系研究科脳神経医学専攻博士課程修了。同年フランス国立研究所にて博士研究員として勤務。10年帰国。15年東日本国際大学教授に就任、20年京都芸術大学客員教授に就任、22年森美術館理事就任。

現在、脳や心理学をテーマに研究や執筆の活動を精力的に行っている。科学の視点から人間社会で起こりうる現象及び人物を読み解く語り口にて定評がある。著書多数。

趣味：現代アート、和装、読書（歴史、ミステリー）、香りを楽しむこと、スキューバダイビング、クレー射撃



## 素材を知る[6] 漆 うるわしのちから

齋藤潮美 漆装飾研究者[個人会員]



### 1. はじめに

アジアで産出する漆(うるし)は、高度に発達したこの地域独自の文化を形成しました。漆は化学的バランスのとれた天然塗料である特性をいかして、古来より漆器に用いられるだけでなく、金属や陶磁器の接着剤としても利用されています。本稿では、素材としての漆についてお話しします。

### 2. うるしとは何か？

#### (1) 漆樹・漆液の特質

漆とは、「植物分類学でいう漆科植物(Anacardiaceae)から分泌する(傷をつけた場合は滲出する)樹液の一種で、その樹液のままを他の物材に塗れば皮膜を生じ、塗料となるもの」です(注)。古くから塗料や接着剤に利用されてきました。

東アジアから東南アジアの地域で利用される漆は大別すると3種類あり、樹種や漆液の性質も異なります。

日本では、ウルシ科ウルシ属のウルシノキから採取され、ウルシノキは落葉高木の広葉樹です。樹液は光合成によって生成されるので、最も活動が盛んなのは夏季で、良質な漆が採取できます。漆液の採取期間は、6月から11月くらいで、約半年間となります。おおよそ樹齢10年～15年ほど育てたウルシノキに、4日ごとに傷をつけて漆液を掻きとり、漆液を採取します。漆は原木を育てて採取するまでに時間がかかり、1本の木から、よく採取しても、おおよそ200g足らずの採取量のため、希少価値が高いことがわかります。



日本の漆樹(齋藤敏彦氏提供)

漆が固まることは「乾く」といわれますが、水分が抜けた乾燥とは異なる反応です。水分の力を借りて酸素を取り込んで固まります。固化した漆は、耐水性、耐熱性、耐酸性、耐アルカリ性の性質を持ちます。長い間、土の中にあった漆器を発掘すると、木部は朽ちても、漆が塗られた部分は残っていることもあります。漆は長い年月を耐える強靱さを持つ、優れた塗料です。

### (2) うるしの歴史

漆は、漆器だけではなく、仏像、調度品、鎧・盾・刀の鞘塗などの武具、建造物装飾、茶器の棗(なつめ)や美術工芸品などにも用いられます。

日本列島における漆の起源をめぐる研究は様々なアプローチがあり、古くは縄文時代の遺跡から漆製品が出土しています。

仏教伝来を契機に、様々な漆工技術が大陸から伝来しました。「玉虫厨子」(法隆寺蔵)は、須弥座の部分には、漆絵と密陀絵(油絵の一種)を併用したともいわれ、絵画・建築・工芸のうえでも重要な価値を有します。正倉院宝物は、後世の蒔絵の源流といわれる貴重な遺品も収蔵されています。唐招提寺金堂の本尊盧舎那仏坐像は、脱活乾漆像の傑作です。

平安時代に建立された中尊寺金色堂の内陣には、螺鈿や蒔絵、箔押しなどの装飾がみられます。

桃山時代には、伏見城の遺構と伝えられる高台寺霊屋内陣、都久夫須麻神社本殿に、蒔絵の装飾がみられます。黒漆塗に金や螺鈿などで装飾された輸出漆器は、ヨーロッパの王侯貴族に珍重されました。

江戸時代には、幕府、大名などの武家に抱えられた蒔絵師だけでなく、本阿弥光悦や尾形光琳など町衆が関わった斬新なデザインの蒔絵が生まれました。建造物装飾にも漆を用いました。各地方では藩が奨励し、現在につながる漆器の産地としての基盤が整いました。

### (3) 素地、技法、色彩

#### 素地

漆は、素材を加工した素地に塗ります。漆塗りの素地は、木材や竹、紙、布、皮革、金属、陶磁などが用いられます。

#### 技法

拭き漆は、木の年輪(木目)をみせる技法で、防水と木材の保護、木目の美しさを引き出します。

乾漆は、麻布などを漆で貼り重ねて素地とする技法で、奈良時代には仏像などに用いられ、造形的に変化に富んだ現代美術工芸作品への応用も見られます。

蠟色仕上げ(呂色塗)は、木目が塗りの表面に出ないように下地をつけ、下塗りと研



乾漆による作品 分水嶺(齋藤卯乃作、画像提供)



ぎ、中塗りと研ぎ、上塗りした漆面を研ぎ、摺漆の後、磨き上げて光沢を出す技法で、茶室や書院などの床框(とこがまち)などにも用います。

蒔絵は、漆で文様を描いた上に、金銀などの粉を蒔いて固めたもので、漆工芸の代表的な装飾法の一つです。

#### 色彩

顔料は、漆に混ぜ合わせて使います。代表的なものは、黒、朱、茶、白、黄、緑などです。青、紫など、多様な色彩表現が可能です。

#### (4)日本の漆、世界の漆

漆を利用する文化は、漆液を産出する樹木が生育するアジア地域特有のものから、西洋にも広がりをもちながら、現在に至ります。

16世紀以降には、深くなめらかな黒漆と黄金に輝く蒔絵や螺鈿などの漆器が欧州に渡り、珍重されました。次第に漆や漆器は日本を代表する工芸品、技術であると欧州で認識されました。

17世紀から18世紀の欧州では、東洋の漆工技術を模倣して西洋で発達した模造漆(ジャパニング)の技術が向上し、17世紀に輸入した日本製漆家具の一部を転用し、18世紀の新たなデザインの漆家具に作り替えることも盛んになりました。マリー・アントワネットは、漆器の収集でも知られています。

1888(明治21)年竣工の明治宮殿は、天井、長押、建具などの室内装飾に漆を用いました。

第二次世界大戦の末期、工芸技術の保存を目的として工芸技術保存資格者と芸術保存資格者を選定し、戦後の文化財行政における無形文化財の制度へと継承されています。

#### (5)歴史的建造物と漆

ベトナム中部の都市フエには阮朝の都城が形成され、現存する歴史的建造物群は、ユネスコ世界文化遺産に登録されました。歴史的建造物群内には玉座、建造物装飾、美術工芸品など多くの漆技術をみることができます。早稲田大学とフエ



ベトナム・フエの歴史的建造物群の漆調査(早大建築史研究室提供)

遺跡保存センターによる国際学術協同調査では、阮朝期の漆生産技術に関する復原的研究も行われています。

「伝統建築工匠の技:木造建造物を受け継ぐための伝統技術」は、2020年12月にユネスコ無形文化遺産に登録されました。木造建造物を守るための伝統技術で、日本の文化財保護制度により選定した「選定保存技術」で構成され、漆に関する選定保存技術も含まれます。



日本の文化財建造物装飾の漆(齋藤漆工芸提供)

#### 3.さいごに

漆の原木の栽培から漆液の採取、素地の加工、用具や材料の製作など、漆に関連する生産過程には高度な技の蓄積が必要となります。

漆は光や紫外線で劣化するという点は、弱点でもあります。逆に紫外線を受けた漆は分解し、土にかえるともいえます。文化財建造物の漆保存修理は、なるべく既存の塗膜を残して、その上に漆を補うように用いることから、漆は自己再生可能な塗料ともいえ、文化財建造物の漆保存修理は、持続可能な循環型社会実現の一端を担っています。

古代～現代、日本～アジア～世界まで、漆は長い年月にも耐え、自然にもかえる、唯一無二の素材として、時代や地域の人々の要請に応じて使われ続けてきた歴史が、漆の素材としての確かさを証明しています。

洗練されたうつくしさ、うるわしさ、ぬくもり…、漆という素材がもつ「うるわしのちから」は、木から波及し、国境を越えて、歴史、文化へと豊かに広がりました。自然環境をまもり、文化的景観を新たに育む素材として、aacaでの活動を通じて、さらに漆を探求していきたいと思っています。

[注]

伊藤清三『日本の漆』

[参考文献]

伊藤清三『日本の漆』

熊野裕従『漆-古代から現在-未来、そしてアジアから世界へ』

中川武『日本の家 空間・記憶・言葉』

日高薫『異国の表象 近世輸出漆器の創造力』

室瀬和美『漆と伝統』



## 韓国における「建築物美術作品制度」の変遷と展望

関鎖京 北海道教育大学岩見沢校芸術文化政策研究室 准教授



### I. はじめに

韓国の「建築物美術作品制度」とは、延べ面積10,000m<sup>2</sup>の建築物を新築または増築する建築主に対し、建築費用の一定割合(1%以内)を美術作品の設置に充てるか、あるいは文化芸術振興基金に出捐することを義務付ける制度である。本制度は、1960年代にフランスやアメリカで始まった「パーセント・フォー・アート(Percent-for-Art)」の概念を導入したものであり、都市景観を豊かにし、市民の文化的享受権を拡大すると同時に、芸術家の創作活動を公的に支援することを目的としている。その基本理念は、公共空間の芸術的形成による「都市景観の向上(文化環境の改善)」、日常生活における「芸術享受の機会拡大(文化福祉の向上)」、および「作家の創作活動支援とメセナ活動の促進(芸術産業の発展)」という三つの側面から構成されている。本稿では、この制度の歴史的変遷から最新の法改正、および運用実態について詳述する。

### II. 制度の沿革と文化芸術振興法関連条項の変遷

本制度は1972年の導入以来、社会情勢の変化に応じてその実効性を高めてきた。

#### 1. 導入と勧告の時代

(1972年-1980年代前半)

1972年、文化芸術振興法の制定に伴い「建築物に対する美術装飾品設置勧告」として初めて導入された。当初は延べ面積3,000m<sup>2</sup>以上の建築物を対象とし、建築費の1%以上を美術装飾に充てることが推奨されたが、建築主の自発的協力に基づく「勧告」に留まり、実効性は限定的であった。

#### 2. 実効性の強化と義務化への過程

(1984年-1994年)

1980年代後半から、制度の実効性を高

めるために段階的な基準の明文化が行われた。1984年には大統領令により「建築物美術装飾品設置勧告基準」が策定され、実質的な行政指導による強制力が付与され始めた。1988年には対象建築物の適用基準が延べ面積7,000m<sup>2</sup>以上へと調整された。また、1986年のアジア競技大会や1988年のソウルオリンピック開催を控え、都市景観の整備が急務となったソウル特別市では、これに先立つ1984年に建築条例を通じて美術作品の設置を義務事項として規定するに至った。

#### 3. 全面的義務化と制度の課題

(1995年-2010年)

1995年、大統領公約を背景に文化芸術振興法が改正され、美術作品の設置が全国的に義務化された。これにより設置数は急増したが、一方で「量産型の石像による作品の画一化」や「建築主・ブローカー間でのリベート授受」といった不透明な流通構造が社会問題化した。なお、2000年には建築主の経済的負担に配慮し、料率が「1%以上」から「1%以下」へと調整されている。

#### 4. 制度の柔軟化と管理体制の構築

(2011年-現在)

2011年、「美術装飾」から「美術作品」へと用語が改められるとともに、建築主が直接設置する代わりに基金への納付を選択できる「選択的基金制度(基金出捐制)」が導入された。さらに2022年の改正では、設置後の管理や公募に関する条項(第9条の2-第9条の4)が新設され、「設置中心型」から「維持・管理重視型」への大きな転換が図られた。

### III. 2022年制度改善内容の特徴

制度の運営過程では、美術作品の設置が建築許可のための行政的要件として認識され、形式的な作品が量産され、

都市の文脈や市民の利用体験を十分に反映できないといった限界が持続的に提起されてきた。また、作品設置後、維持・管理責任が建築主にのみ帰属され、専門人材と管理予算の不足による老朽化・毀損・放置問題が繰り返され、作品の移転・撤去過程においても体系的な管理基準が不在であるという批判が続いた。

このような問題意識に基づき、2022年には文化芸術振興法第9条の改正により、建築物美術作品制度に対する大幅な制度改善が行われた。主な内容は、制度の目的を単純な義務履行中心から脱却させ、公共美術の質的向上と持続可能性の確保に切り替えることにあった。このため、まず美術作品の範囲と概念をより幅広く再定義し、彫刻や造形物中心の既存の慣行から抜け出し、メディアアート、空間連携型作品、景観と結合した公共美術プロジェクトなど、多様な形態の芸術表現を制度的に受け入れられるようにした。

また、作品設置中心の運営方式で発生した問題を改善するために、文化芸術振興基金出捐制度の活用をより明確に整備し、基金の使用目的と手続きに対する管理・監督を強化した。これを通じて、基金が単に設置義務を代替する手段にとどまらず、地域単位の公共美術事業と市民参加型文化芸術プロジェクトに戦略的に活用できる基盤を整えようとした。さらに、基金出捐の透明性と地域還元性を強化することで、制度に対する社会的信頼を高める方向で改善が推進された。

2022年の制度改善では、美術作品の事後管理体系の強化も重要な課題として取り上げられた。作品設置後の維持・管理、保存、移転・撤去に対する基準をより具体化し、地方自治体の管理・点検の役割を明確にすることで、作品が長期的に公共資産として機能できるよう制度的装置を補完した。これは建築物の寿



命周期と美術作品のライフサイクルを連動させて管理しようとする試みであり、既存制度の最大の弱点として指摘されてきた事後管理問題を改善することを目的としている。

審議制度もまた、2022年の改正を通じて改善の方向性が提示された。審議基準を単純な価格・安全性中心から脱却させ、作品の公共的意味、場所性、市民の体感度をより重点的に評価するよう誘導し、審議委員構成の専門性と多様性を強化することにより、審議の質的水準を高めようとした。これを通じて形式的な作品選定の慣行を緩和し、公共美術としての社会的価値と芸術的完成度を同時に確保しようとする政策的意図が反映された。

#### IV. 美術作品設置の実務的枠組みと権利義務関係

実務プロセスにおいては、公共空間の質的向上を図る法的義務と、作家との契約上の権利関係を適切に処理する必要がある。

##### 1. 対象範囲と算定基準

対象は共同住宅、業務・宿泊施設等の多目的施設に及ぶ。費用は「延床面積×標準建築費×適用比率」で算出され、基金への出捐を選択する場合は直接設置費の70%相当額を納付する。

##### 2. 行政プロセスと審議体制

知事直属の「美術作品審議委員会」が、芸術性、環境との調和、価格の妥当性を厳格に審査する。この承認を経て初めて建築物の使用承認に至る。

##### 3. 契約構造と権利の帰属

- ・所有権：制作費用の完済時に建築主へ移転する。
- ・著作権財産権：複製権等は原則として作家に帰属し、建築主の商業利用には作家の許諾を要する。
- ・著作人格権：氏名表示権や同一性保持権は作家に専属するため、原則と

して不当な改変は禁じられるが、増改築等のやむを得ない事情がある場合は例外とされる。

- ・管理責任：日常的な保守や安全確保の責任は建築主に帰属し、自治体による点検の対象となる。

#### V. 美術作品設置の現状

2025年現在、美術作品の累計設置数は25,666作品に達している。設置場所およびジャンル別の統計は以下の通りであるが、算出基準や集計対象の違いにより、統計ごとに総数が異なる場合がある。

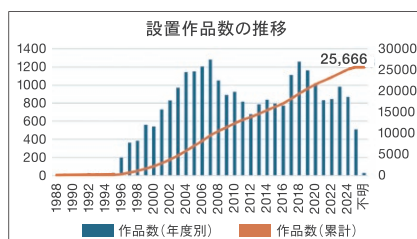


図1 設置作品数の推移

出典：公共美術ポータル「建築物年度別統計」  
[https://www.publicart.or.kr/statistics/year\\_statistics.do?menuId=21](https://www.publicart.or.kr/statistics/year_statistics.do?menuId=21)をもとに作成

設置場所は「共同住宅」が45.6%と全体の約半分を占め、次いで「近隣生活施設」が35.2%となっている。

用途	作品数	割合
共同住宅	11,695	45.6%
近隣生活施設	9,034	35.2%
業務施設(事業所、役所等)	2,466	9.6%
宿泊施設	922	3.6%
その他(医療、販売、教育等)	1,549	6.0%
合計	25,674	100%

表1 用途別作品設置状況

出典：公共美術ポータル「作品用途別統計」  
[https://www.publicart.or.kr/statistics/bduse\\_statistics.do?menuId=19](https://www.publicart.or.kr/statistics/bduse_statistics.do?menuId=19)をもとに作成

作品ジャンルでは「彫刻」が77.9%と圧倒的多数を占めており、ジャンルの偏重が顕著である。

ジャンル	作品数	割合
彫刻	20,003	77.9%
絵画	4,715	18.4%
工芸、メディアアート、壁画、写真、噴水等	953	3.7%
合計	25,671	100%

表2 ジャンル別作品設置状況

出典：公共美術ポータル「作品分類別統計」  
<https://www.publicart.or.kr/statistics/genreStatistics.do?menuId=17>をもとに作成

#### VI. 制度的意義と今後の展望

建築物美術作品制度は、「文化芸術振興法」の制定とともに導入されて以来、数十年にわたり韓国の公共美術政策の中核を担ってきた。本制度は、公的部門に留まらず一定規模以上の民間建築物にも適用される強制的な枠組みである点、そして建築事業を通じて文化振興を社会構造の中に組み込んだ点において、極めて重要な意義を有している。

一方で、私的所有物でありながら公共空間を形成する美術作品の公的な位置づけを巡る議論など、運用上の課題も依然として残されている。しかしながら、2022年の制度改善は、本制度を単なる規制中心の義務履行から、公共美術政策全体を包括する戦略的な制度へと転換させようとする画期的な試みであると評価できる。今後は、こうした新たな運用体制の定着を通じ、都市空間と芸術がより高度に調和した文化的環境が醸成されることが期待される。

##### 【参考文献】

ベ・クアンビョ「建築物美術作品制度の現状及び改善課題」『指標で見るイシュー』第126号、国会立法調査処、2018年6月20日。  
 ビョン・ジヘ、キム・ヒョンギョン、イ・ヒジュ「建築物美術作品制度運営管理改善方案研究」韓国文化観光研究院、2023年。

##### 【参考サイト】

公共美術ポータル ([https://www.publicart.or.kr/oldPublicart/HTML/system/system\\_synopsis.do?menuId=9](https://www.publicart.or.kr/oldPublicart/HTML/system/system_synopsis.do?menuId=9))  
 韓国文化芸術委員会 (<https://www.arko.or.kr/main/arko>)  
 国家法令情報センター (<https://www.law.go.kr/main.html>)

##### 関鎖京 (みんじんきょう)

韓国ソウル生まれ。2000年来日後、文化庁「海外招聘研修生」として東京室内歌劇場でオペラ制作を担当。東京藝術大学大学院応用音楽学専攻を修了。博士(学術)。2006年2月より北海道教育大学に在職。専門は文化政策。韓国の文化政策に関する研究として、文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業「諸外国の文化政策(韓国担当)」など、多数の論文を発表。近年は、「地域アーツカウンシル「多文化共生とアート」などのテーマについても研究を進めている。現在、日本文化政策学会理事長。公益財団法人北海道文化財団「令和2年度アート選奨」受賞。



総務委員会

12月10日、第37回設立記念総会・AACA賞2025表彰式が開催されました。

第1部の設立記念総会では東條隆郎会長のご挨拶から始まり、和出知明専務理事による会勢報告では、2025年度の協会活動及び各委員会の主な活動が報告されました。

その後、和出専務理事より「会費の改定と新たな活動方針」について詳しい説明がありました。

当協会の財政状況は経済情勢の大きな変化と、会員数の減少が重なり赤字決算が続いており、今後5年以内には会の存続が危ぶまれる危機的な状況が予測されています。この状況を改善する為に会費の改定を実施すると説明がなされ、会員の皆様のご理解を求めました。

併せて「未来を見据えたビジョン」を打ち出し、会員の皆様に新しい価値(VALUE)を提供する魅力的な施策案について紹介がありました。

第2部のAACA賞2025表彰式では、最初に全受賞作品の紹介動画が上映され、各受賞作品の詳細を鑑賞することができました。

当日の列席がかなわなかった古谷誠章AACA賞選考委員長のビデオレターによる講評では、どの作品も甲乙つけ難い作品であったとの総評がありました。今回は、美術工芸賞が2点と美術工芸賞奨励賞が1点選ばれ、よりaacaらしさが際立った表彰となりました。

東條会長より受賞者・入選へ賞状が贈られた後、AACA賞を受賞されました「小豆島 The GATE LOUNGE」のVUILD株式会社CEOの秋吉浩気様を受賞のご挨拶を述べられ、設立記念総会並びにAACA賞表彰式は閉会となりました。

(委員長 小谷純造)



AACA賞「小豆島 The GATE LOUNGE」撮影:Takumi Ota



美術工芸賞「荏原 畠山美術館」本館展示室 撮影:走出直(株式会社エスエス)



美術工芸賞「会津柳津駅舎情報発信交流施設」  
撮影:小川重雄



芦原義信賞「大阪避雷針工業神戸営業所」  
撮影:母倉知樹



## AACA賞2025(第35回):公開・最終審査会

### 表彰委員会

今年はAACA賞の在り方が随分議論されました。この賞は建築の賞なのでアートには関係ないとか、アーティストのための別の賞が欲しい等の意見も多く聞かれました。芦原義信先生の賞創設時の言葉は実は受け継がれて来ており要項にも謳われていますし、現在も、建築と他の分野との連携こそが求められるという精神が強く存在しています。しかしそうは理解されていないのです。それを受けて今年の審査では、事前に委員全員がAACA賞の特性を十分に議論し、他の建築賞との差を改めて認識するよう努めました。建築を中心とするも、複数分野の連携の成果を重視する姿勢を改めて共有して審査が始まったのです。

今回のAACA賞の募集は例年通り7月に始まり、集まったのは昨年より多い

74の作品でした。委員には事前に作品の電子データを配布していますが、多くの作品を短時間に読み解くのは一仕事です。第一次審査会では19の現地審査対象作品を選びました。甲乙つけがたい作品群の中では、委員の評価が広く分かれたため、当落は僅かの差であったように思います。

現地審査は例年のように手分けをして作品を訪れました。作者の丁寧な説明を聞き、自らの五感で作品に触れます。これがまさに審査の要なのです。提出資料では把握できない多くの情報を仕入れて、改めて評価をしてゆきます。

公開した最終審査では作者たちがプレゼンテーションを行い、委員も改めて作品の特質を把握し、議論しました。委員の意識の中に既にインプットされたこ

の賞の特徴を前提とした評価が自然に行われ、二つの美術工芸賞が選ばれるなど例年とは違う結果となりました。来年以降のAACA賞の新たな動きが感じられる雰囲気の中、各賞が決定しました。

なお、これらの受賞作品の情報や審査講評はホームページに掲載されています。また、近くAACA賞受賞作品紹介誌を発行しますので是非ご覧ください。

(委員長 可児才介)



公開審査風景

### AACA賞2025 受賞作品・受賞者

#### ・AACA賞

「小豆島 The GATE LOUNGE」  
VUILD株式会社 秋吉浩気 中井彬人  
伊勢坊健太 中澤宏行/構造設計・監理:  
合同会社Graph Studio 荒木美香 氏岡  
啓威/環境設備 設計・監理:合同会社ス  
タジオノラ 谷口景一郎 藤村真喜

#### ・美術工芸賞

「荏原 畠山美術館」  
大成建設株式会社一級建築士事務所  
渡邊智介 有泉祐子 杉江夏呼 中谷扶美  
子 横山恭太/株式会社新素材研究所  
榊田倫之 富岡大 幾留温

「会津柳津駅舎情報発信交流施設」  
株式会社 TIT 田中大朗 池田晃一 富沢  
真二郎 安部遥香

#### ・芦原義信賞(新人賞)

「大阪避雷針工業神戸営業所」  
株式会社竹中工務店 山崎篤史 大石幸奈  
村上友規

#### ・優秀賞

「Lens Park」  
EIKA studio 榮家志保

「小田垣商店」  
株式会社新素材研究所 榊田倫之 内海  
美里 津村晶

「警固竹友寮」  
竹中工務店 木下美佳

#### ・奨励賞

「新札幌アクティブリンク」  
大成建設株式会社一級建築士事務所  
出口亮/株式会社ネイ&パートナーズジャ  
パン 渡邊竜一 池邊慎一郎/株式会社  
安東陽子デザイン 安東陽子

「対馬博物館」  
石本建築事務所 能勢修治 大橋航

「make SPACE」  
株式会社 UID 前田圭介

#### ・美術工芸奨励賞

「黎明小橋」  
株式会社ホシノアーキテクツ 星野裕明

#### ・特別賞

「TODA BUILDING」  
戸田建設株式会社 河野利幸 中川康弘  
一條真人 田嶋友一郎 吉川拓也/株式会  
社プレイスメディア 吉田新 吉澤真太郎  
入江貴道/トモルデザイン・メグロ株式会  
社 目黒朋美

#### ・入選

「Grove Strolling Corridor」  
and to 建築設計事務所 谷口幸平 河野  
裕太 山口波大(元スタッフ)

「学ぶ、学び舎」  
VUILD株式会社 秋吉浩気 中澤宏行  
伊勢坊健太

「ヤマト本社ビル A棟・B棟」  
株式会社日建設計 金子裕介 伊藤周平/  
KAJIMA DESIGN 田持成輝

「自由な家」  
アキチ アーキテクツ 吉田州一郎 吉田あい/  
アルテック 阿部勤(故人)

「TAC.T BRIDGE」  
大成建設一級建築士事務所 輪湖大元

「ナミツキ 大洗の民泊ダイニング」  
株式会社G ARCHITECTS STUDIO  
田中亮平/Japan.asset management株  
式会社 内山博文

「蔵春閣」  
大成建設一級建築士事務所 松尾浩樹  
池間典一 中谷扶美子

※部署名・肩書省略

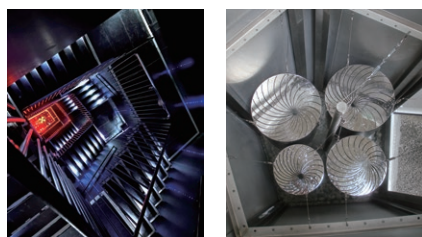


## 第16回aacaサロン サウンドスケープ・デザイン —風景に耳を開く—

会員増強委員会

### キョロロのTing-King-Ping 音の泉 (松之山自然科学館/新潟県)

2024年のaaca建物視察会(\*)は新潟方面でしたが、一番目に訪れたのは越後松之山「森の学校 キョロロ」でした。紅葉まっさかりの山に浮かぶ赤錆のかたまり。真っ暗な塔を登るとアクリル板の開口が周囲の緑の山並みを切り取って自然との一体性を感じるすばらしい体験だったのですが、この塔にはもうひとつ大地と空をむすぶものがありました。それが庄野さんによるサウンドスケープの作品です。塔の階段を登る時には暗闇の恐怖感もあったが自然と声が出てしまうことで気がつかないこともあるのですが、螺旋階段中央の掘りこまれたところに水が滴って音をたてているのです。静かに耳を澄ますと水滴が奏でる音が塔をのぼって空に向かって響いていました。敷地内の湧水を引き入れ、その水滴が独自に製作した発音フィンにあたる一期一会の音の演奏が聞こえていました。



上:キョロロ外観。左:螺旋階段の上から見下ろした塔中の「音の泉」。右:発音フィン。様々な大きさ・厚さで、その時々多彩な音を奏でる

第16回aacaサロンは、当協会会員で第10回AACA賞受賞者のサウンドスケープ・デザイナー庄野泰子さんにお話を伺

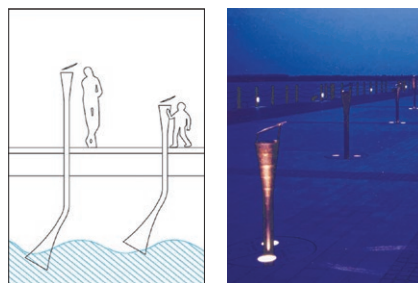
いました。その場所でしか体験できない音をできるだけ会場で参加した人が実感できるように、作品ごとに動画を準備いただきました。また音が出る仕組みを理解できるように図面だけではなく作品の制作過程の動画も用意していただき、聴覚も刺激するユニークなサロンになりました。

### 潜在する音の海 Umi-Tsukushi、 Wave Wave Wave

(小名浜港第2埠頭/福島県)

サウンドスケープ・デザインが水辺で本格的に取り組まれた世界初の事例で、波の音が巨大な聴診器で伝わってきます。暗くなると波の音に呼応してホーンが明滅し、新しい自然の感じ方に気づくことができます。その先には、海の上に寝転んで波の音を体感できる網状の巨大なベンチ「Wave Wave Wave」が設置されています。

一連の作品を現地審査した当時のAACA賞選考委員は「無理に装置で音を造成し、人間に押しつけるのではなく、一寸気の付かない音をそのまま人に伝えようとする作家の姿勢は共感を呼ぶものであった。だから風や波の無い時は音は聞こえてこない。」と評しています。



夜は波音に呼応して明滅するUmi-Tsukushi

### coMIMInication

(茅野市民館・茅野市美術館/長野県)

大きな糸電話とも言えそうな伝声管に子どもたちのおしゃべりや笑い声が伝わる。音のワークショップも開かれて地域の音への関心をもつ機会にもなっているそうです。

開催日:2025年8月6日

話し手:サウンドスケープ・デザイナー 庄野泰子さん

モデレーター:NTTファシリティーズ 石原智也

会場:小松ウォール工業

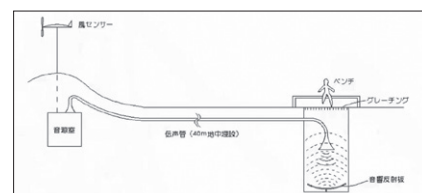
101 TOKYO SHOWROOM (東京・神田)



中庭をはさんで離れた空間を繋ぐ伝声管。右は音で遊ぶ子どもたち

### 風のベンチ(風の丘葬祭場/大分県)

煙を出せない現代の葬祭場で、煙に代わり風の音が地中から空に向かって立ちのぼるレクイエムとしてデザインされています。建物を設計した横文彦さんは、近くに住むお年寄りが風の丘葬祭場について「わたしはここで最期を迎えたい」と言っていたことに感銘を受けたそうですが、庄野さんがデザインされた風の音がきっと訪れた人にささやくのではと想像しました。庄野さんはサロンの冒頭で、M.シェーファーが『世界の調律』でヴァンクーバーのサウンドマーク(標識音)について記述していることを説明されていましたが、まさにここでは風の音が人生に響くサウンドマークになっているということを感じ、ぜひ実際に体験してみたいと思いました。



風のベンチと発音システム。右上は風の音を伝えるベンチ下の地中ホーン

\*会報100号(2025年1月発行)にて紹介(P14-15)

<https://www.aacajp.com/record/newsletter/pdf/No100.pdf>

(副委員長 石原智也)



## 2025年aaca夏季交流会

総務委員会

開催日:2025年8月25日

場所:田町センタービルビータ3階(東京・港区)

aacaでは毎年2回会員交流会を開催しています。1月または2月開催の「新春の集い」と8月の「夏季交流会」です。新入会員と既存会員が顔を合わせ、おしゃべりしながら情報を交換し、新たな関係を構築することを目的としています。

2025年の夏季交流会の参加者は55名。猛暑の中、開始前から人が集まり、グラスの底から湧き上がるビールで喉を潤しながら談笑が始まっていました。

東條隆郎会長の挨拶で幕が開き、aacaの今後の活動などについてのご紹介がありました。次に展覧会委員会齋藤卯乃副委員長、三塩達也担当理事から6月に開催した第8回BOX展に関する報告がありました。会場には新入会員で優秀賞の二木啓子さんと、オーディエンス賞に輝いた高須好子さんの作品が展示され、ご本人による作品説明もありました。続いて森暢郎副会長の乾杯の挨拶、委員長による委員会の活動紹介、委員会担当理事のお話などがありました。

新入会員の皆さんからコメント等をいただきましたので、ここにご紹介します。

### 二木啓子さん(陶芸作家)

滑らかな曲面と緊張感のあるライン構成で、有機と幾何が共存するフォルムを追求。マットな質感と繊細な刻線が、現代的なリズムを生み出しています。



《揺蕩う(たゆたう)》

### きたがわゆきこさん

(テキストイル造形作家)

写真は、自然の枝も素材として取り込み、ステンレスメッシュや染めたオーガンジー

布、麻素材、和紙などの紙類、糸などにより制作した、森をイメージした照明です。主に縫い、染め、綴織などの技法を用い、ミクストメディア作品を作っています。



《Skogsljus (森の光)》

### 山本茂義さん(建築家)

建築設計を45年続けてきました。私が建築の使命として気に掛けてきたのは「街の風景との融和」と「時間を超越した新旧の共存」。写真は久米設計時代に古い校舎を再生保存し、新しい部分との対比を試みた早稲田大学3号館。



出典:早稲田大学HP

### 勝山里美さん(編集者、建築家)

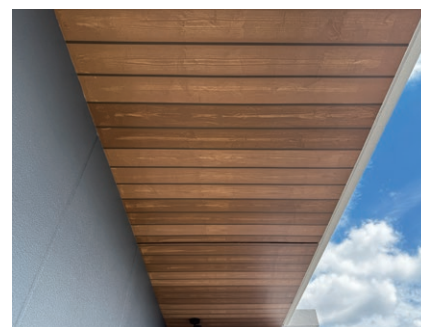
大林組での建築意匠設計、建築ギャラリーの企画・運営、広報/広告業務の経験を活かし活動しています。aacaでは広報およびPFA研究委員会に参画。交流を楽しみつつ、文化的で豊かな空間ってなんだろうと考える日々です。



### 株式会社ピアレックス・テクノロジーズ

廣瀬直輝 代表取締役社長

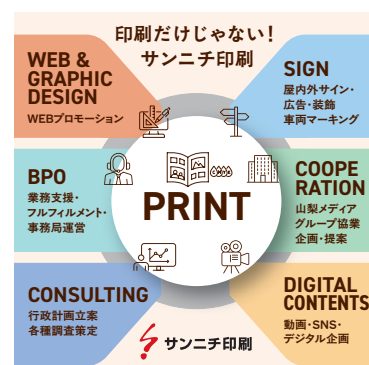
打ち放しコンクリート外壁の保護コーティング塗料を製造・開発から責任施工にてご提案しています。近年では描画技術を用いたエイジング塗装や木目調塗装(写真)など意匠性の高い塗装もご提案しており、大変ご好評いただいております。



### 株式会社サンニチ印刷

萩原雅人 営業部部長

サンニチ印刷は明治5年創業、150年以上の歴史を持つ総合印刷会社です。企画・編集からデザイン、印刷、製本まで一貫した体制を整え、Web制作や動画制作のほか、プロモーション業務からBPO業務まで、幅広い分野で“伝える”“魅せる”をサポートしております。



会の後半では、新任理事の鳴海雅人理事と藤本裕之理事のお話、アイカ工業によるセミナーの紹介がありました。楽しい時間はあっという間に過ぎ、和出知明専務理事の中締めでお開きとなりました。

今年も多くの参加者があり、大いに盛り上がり、実りの多い交流の場となりました。(委員 中野恵美子)

## 第210回aacaフォーラム:Aalto talks in JAPAN

### アルヴァ、アイノ、エリッサ・アアルト：建築とデザインにおける人間的アプローチ

フォーラム委員会

第210回aacaフォーラム「Aalto talks in JAPAN」では、フィンランド・ユヴァスキュラ市にあるアルヴァ・アアルト設計のセイナツァロ（Säynätsalo）町役場を拠点に、アアルトの建築遺産を継承するガイドツアー「aaltotalks」に取り組むPeter de Groot氏（以下、ピーター）とAnnika Vandeveldel氏（以下、アニッカ）ご夫妻を迎え、「アルヴァ、アイノ（前妻）、エリッサ（後妻）：3人のアアルトによる協働の本質」に迫った。

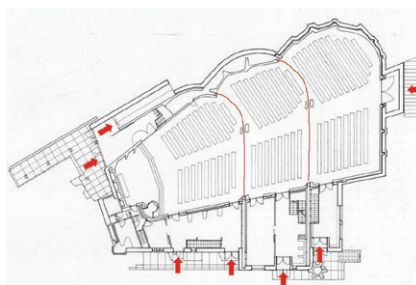
建築家アルヴァ・アアルトの名のもとに語られがちな作品群は、実際にはアイノ、そして後年のエリッサとの協働によって形づくられた総体である。三者それぞれの個性、才能、そしてビジョンはいかに交差し、建築、家具、ガラス工芸といった成果へと結実したのか。ピーターとアニッカの語りによって、作品創造のプロセスが丹念に紐解かれていった。

冒頭で詩人ミュリエル・ルーカイザーの言葉「宇宙は原子ではなく、物語でできている」を引用。一方通行の「lecture」というよりも、会場との呼応の中で思考を紡ぐ「talk」のように本トークを進めるとし、「アアルトの物語を語る(talk)」ことと同時に、「アアルト建築が私たちに語りかけてくる(talk)」場が立ち上げられた。

ピーターとアニッカは、場の空気を身体で感じ取るためにセイナツァロ町役場の「aaltotalks」ではいつも裸足となる。今回も素足となって臨んでいた。

フィンランドは長くスウェーデンとロシアの支配下にあり、1917年に独立後も内戦と貧困に苦しんだ歴史があり、アアルトは「新しい国の文化とアイデンティティを形にする」使命を担い、その象徴のひとつとしてイマトラの「三つの十字架の教会」は設計された。この教会は、光と音を重視した彫刻的空間で、曲線天井や高窓が柔らかな自然光を取り込み、静謐で

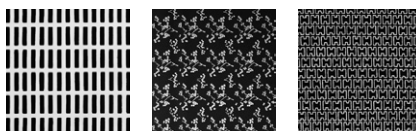
詩的な雰囲気を生み出している。イマトラは戦後、3つの村が合併して誕生した町で、その象徴として3本の十字架を持つだけでなく、教会の内部空間も3つに分けられている。



三つの十字架の教会 平面図

「建築を構成するのは、素材や寸法だけではない。その背後には、生活、記憶、自然、社会、そして人と人との関係が幾層にも折り重なっている。そうした視点に立つと、アアルトの建築は単なる「名作」ではなく、人と自然の物語が堆積した『生きた風景』として立ち現れる」、ピーターとアニッカはそう語る。

3人のアアルトの協働関係は、テキスタイルの模様になぞらえて説明された。アイノは色彩計画や家具・生活領域への細やかな眼差し、エリッサはディテールの統合と事務所運営、アルヴァは全体の統合と秩序の付与。建築の外形だけでは捉えきれない役割の重なりが、アアルト作品特有の「柔らかさ」を生み出しているという。



アルヴァ      アイノ      エリッサ  
3人のアアルトを象徴するテキスタイルパターン

ここで引用されたのが、リートフェルト設計のシュレーダー邸の施主であり共同設計者でもあったトルース・シュレーダーの言葉である。「この家は私たちの子どもです。子どもができたときに、どちらの親がどこをつくったかなど問いませんよね」。この言葉は、「誰の仕事か」という帰属を超え、関係性の全体を捉えることの重要性を示していた。

3人のアアルトの建築思想は、2つの言葉に象徴される。アルヴァの「建築とは、人々の生き方を形にすることだ」という理念、そしてアイノの「私たちは自然とともに、自然の中で生きる存在」という言葉である。この哲学は、夫妻が手がけた「バイミオ・サナトリウム」において鮮やかに体现されている。結核療養施設である同建築には、患者の心身の回復を支える数多の配慮が施されている。横たわる視点に合わせた天井の色調、柔らかな光の反射、静かな換気音、清掃性を考慮した曲面の床端部、呼吸を助けるバイミオチェア、これらのディテールが現地写真とともに紹介された。また、紹介されることの少ない、死者のための祈りの場でもある静謐なローズガーデンの存在は、建築が生に寄り添うと同時に、死をも包み込む器であることを物語っていた。



機能的な療養室

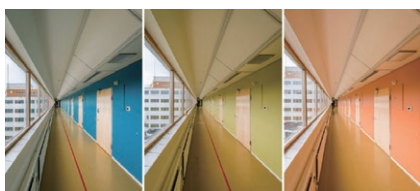


バイミオチェア（アルヴァが家具を生産・販売のためにアイノと設立したアルテック社の主要商品）。椅子に座るのはアニッカ





エントランスの有機的な受付



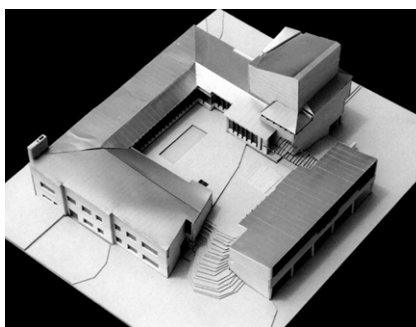
画家のエイノ・カウリアが協働した特徴的なフロアの色設計画

ピーターとアニッカは、アアルト建築の本質を「全体性」「文脈性」「人間中心のデザイン」「実験精神」「芸術と自然の融合」という五つの要素で整理した。建築から家具、照明、素材、風景に至るまでを一体の体験として統合する全体性。敷地や地域文化、生活を読み解く文脈性。光・空気・音・手触りといった身体感覚への深い配慮。積層合板の曲げ加工に代表される実験精神。そして芸術的造形と自然現象を調和させる姿勢。これらが、アアルト作品に独自の「生命性」を与えているという。

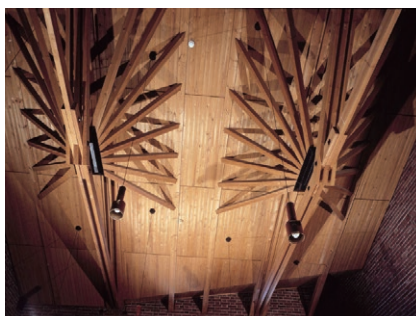
自然との関係をめぐる象徴的な逸話

として、セイナツァロ町役場でアルヴァが「窓ガラスは清掃してはならない」と指示したという話が紹介された。現地では本当に窓拭きがされていないそうで、曇りガラス状態とのこと。森の影や光の揺らぎをそのまま室内に取り込み、建築を環境の「共演者」とするための選択である。制御された清潔な光ではなく、変化し続ける「生きた光」を受け入れる姿勢は、今日の環境共生型デザインにも通じる先見性を感じさせる。

アニッカは、学生時代に初めてセイナツァロ町役場の写真を見た時の率直な印象は「石の塊のようで良さが分らなかった」というものだったが、後年、実際に訪れた際に感じたのは「家のような温かさ」だったという。写真や図面ではなく、空気や湿度、光の質を身体で受け取る経験こそが、アアルト建築理解の鍵であると2人は強調する。町役場中央の中庭広場は、守られながらも開かれた温かな公共空間として、議場や図書館と連続し、「公共とは何か」を身体感覚として問いかけてくる。



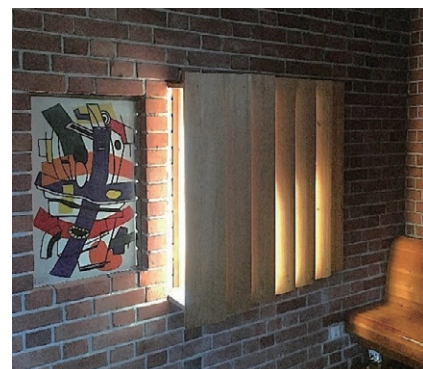
セイナツァロ町役場 全景



アルヴァが「蝶」と称した天井トラス構造体(セイナツァロ町役場)

終盤では、今日の私たちが3人のアアルトから学び得るものとして、「五感を用いること」「理論や直線から出発しないこと」「自然や社会から着想を得ること」「技術と人間の価値の均衡」「遊び心を忘れないこと」が挙げられた。それらは設計技法ではなく、建築を人間の営みとして捉える姿勢そのものにほかならない。

セイナツァロ町役場には、アルヴァと親交のあった画家フェルナン・レジェの作品がレンガの壁に埋め込まれている。その作品を照らすために窓まで設けられながら、最終的には上下逆に据え付けられたという逸話は、3人のアアルトの建築が持つ「柔らかさ」と人間味を象徴するエピソードとして印象的であった。



逆さまのフェルナン・レジェの作品

本フォーラムを通じて浮かび上がったのは、3人のアアルトの建築が「関係性の中で構築され」「物語として生き続けている」という事実である。建築は完成した瞬間に終わるのではなく、その場に集う人々の経験や感情と交わりながら、新たな物語を紡ぎ続ける。アアルトの建築は、今日もなお静かに、しかし確かな声で私たちに語りかけている。自然とともに生きること、人間の幸福を真摯に考え抜くこと、建築を生活の器として扱うこと。その声に耳を澄ますとき、建築が未来の「生き方」をいかに形づくり得るのかを改めて問い直す、示唆に富んだフォーラムであった。

(委員長 萩尾昌則)

写真提供:ピーター&アニッカ

## 地域創生Vol.3 3連続講演会

文化事業委員会

文化事業委員会では2020年より「地域をデザインする」をテーマに研究を進め、その成果を発信する取り組みを行っています。「3連続講演」「シンポジウム」「単行本発刊」で構成されるシリーズも今回で第3回となり、これまでに10地域を取り上げ、計16名の方にご登壇いただきました。

過疎化や人口減少という大きな社会課題に対し、地域の歴史や文化、地勢を活かしながら行政や建築家、アーティスト、専門コンサルタント、ディレクター達が知恵を結集する取り組み。それは地域創生に確実に寄与しており、アートや建築の持つ力が地域に新たな可能性をもたらしていることを実感しました。

さて、Vol.3の3連続講演会が無事終了しましたので、その概要をご報告いたします。

◎第1回 2024年4月23日開催

DEWKSを惹きつける徹底した街づくりと市民サービスで人口増加率7年連続No.1を実現/千葉県流山市

会場：サンゲツ品川ショールーム

講師：大西康之氏  
(ジャーナリスト)



人口増加率が6年連続(2016-21年)1位ということもあり、注目を集める流山市の特長を解説した『流山がすごい』(新潮新書、2022年)の著者である大西康之氏。当日は新聞記者時代のエピソードも交えて、同市の魅力的なまちづくりについて語っていただきました。

大西氏自身が約30年前、流山市に家を構える決め手となったのは、東京都内

に電車(つくばエクスプレス)で、30分で通えるという地の利と、バブル経済の崩壊で地価が底値をついたであろうというタイミングがあったと言います。そのような理由でにわかに流山市を含む常磐線沿線エリアが脚光を浴びてきたわけですが、特に同市が人口増を継続してこられたのは、現市長の井崎義治氏の施策によるところが大きいと、大西氏は指摘します。

井崎氏はつくばエクスプレスが開通したのをきっかけに沿線周辺で始まった恣意的な開発に対して危うさを感じ、「このままではせっかく住み始めた流山市もでたらめなまちになってしまう」と市民活動をスタート。最終的には自分で市政に取り組むしかないと決意して市長選に打って出ます(2026年1月現在、6期目)。

井崎氏が市長として取り組んだ、駅前広場を中心にした景観整備や住宅施策、通勤前後の効率的な送り迎えをかなえる保育ステーション、物流施設の誘致など、充実した子育てや長く住み続けられる市域を可能にする経済成長戦略が他の自治体との違いとなり、目に見えて流山市の隆盛に表れていることを納得させられました。

◎第2回 2024年5月13日開催

コミュニティデザインにより活性化した島づくりでUターン移住者を増やす/島根県隠岐諸島

会場：サンゲツ品川ショールーム

講師：西上ありさ氏

(Studio-L TOKYO代表)



まちづくりのカギを握る要素として重要視されている「コミュニティデザイン」の旗振り役として注目される、studio-L東京事務所代表の西上ありさ氏を招いて開催された連続講演会の第2回。行政学が専門だという西上氏から初めに、行政における総合計画や、コミュニティデザインという手法について詳細な説明がなされました。

コミュニティデザインは、住んでいる地域や年齢、性別、障害の有無にかかわらず「どんな人でも課題を解決する能力を持っている」という前提からスタートすると西上氏。あらゆる人たちの能力が発揮できるように支援すること。さらに行政と一般市民・住民が協働していくためのステップをつくっていくためのお手伝いをしていることについて語っていただきました。

講演中盤からはコミュニティデザインの具体例として、島根県隠岐郡海士町をご紹介します。2000年代初頭には財政破綻も危ぶまれるほどの厳しい状況にあった同町は、2002年に就任した山内道雄町長のもとで自立促進プランを立ち上げ、行政改革に取り組みしました。その過程でstudio-Lに依頼が寄せられ、総合計画にまつわる計画書づくりや、それに伴う市民活動のサポートなど、西上氏は地元の人々に寄り添いつつ、様々な取り組みを実践してきました。イラストを用いてわかりやすくまとめられた計画書のデザインや、大学進学を可能にするべく工夫を凝らした島の高校改革、高齢化する集落の課題を解決するための集落支援・支援員等の施策が印象的でした。

◎第3回 2025年11月14日開催

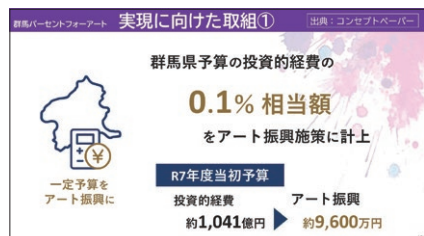
パーセントフォーアートで地域創生を目指す街/群馬県

会場：小松ウォール工業株式会社 101 TOKYO



## 第1部 動き出したパーセントフォーアート

講師：佐藤貴昭氏  
(群馬県地域創生部長)



群馬県の「パーセントフォーアート」は、山本一太知事(現職)が選挙公約に掲げた政策としてスタートしました。佐藤貴昭氏は文化行政に長く携わった珍しい経歴を持ち、この政策の推進役を担っています。

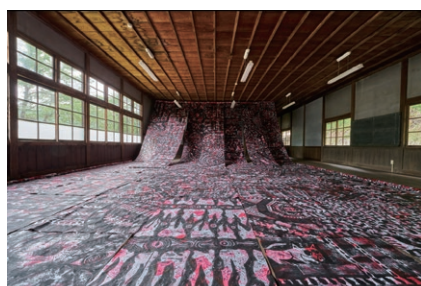
2019年の政策集に「地域公共事業1%を芸術に充てる」パーセントフォーアートの構想を盛り込むことから始まり、翌2020年にアートによる地域創生会議を開催し、政策をモノからコトへ(アート作品の設置だけでなく、より幅広い活動へ転換)と方向づけました。2022年にはアート振興、地域経済活性化、安定財源供給のエコサイクルを理念とする、全国初の「パーセントフォーアート条例」を制定。2023年、条例に魂を込めるべく、具体的な仕組みを定めたコンセプトペーパーを作成し、他国の事例も参考に、制度設計を明確化しました。そのコンセプトペーパーに基づき、まずは安定した財源の確保のために、県予算の投資的経費の0.1%相当額(約1億円)を従来の文化予算とは別枠のプラスアルファとして、アート振興に計上。さらに、持続可能な仕組みの構築が必須と考え、民間からの寄付やふるさと納税などのインセンティブ導入、および一般社団法人設立による、県予算に縛られない複数年でのアート支援ファンドの確立を試みています。

現在は条例の理念に基づき、データベースの構築、アート支援団体との連携、企業とのタイアップ、前橋市の取り組みと

の相互作用など、これらの官民連携の取り組みを通じて、クリエイティブの発信源となり、県民の幸福度アップにつながる未来を目指しています。

## 第2部 建築とアートが活きるまちづくりが地域創生を動かす

講師：山重徹夫氏  
(アートディレクター)



山重徹夫氏は、群馬県の「パーセントフォーアート」政策に関わり、行政の支援によりアーティストの活動の幅が格段に広がったことを評価しています。山重氏の活動の中心は、2年に一度開催される「中之条ビエンナーレ」で、20年以上にわたるアートディレクターとしての地域創造の取り組みです。

今年の中之条ビエンナーレは、鉄鉦石(光石)と絹糸(光る繭玉)の物語を背景に、「光の山(理想郷)」をテーマに開催。約130年前の分校や廃校、養蚕農家など、地域の歴史や文化が残る建物を会場として活用しています。参加アーティストには10日間以上の滞在を義務付けており、温泉や食料の無料提供などで生活を支援。作家は滞在中にその場所の文化、風土、人を取り込み、そこでしか生まれない作品を発表する場として位置づけられています。ディレクターが作品を指定しない「待ちの姿勢」が特徴です。ここでは、地域の人が受付や会場の設営、飲食物の販売などに協力し、地元のお祭りや伝統芸能の発表と連携し、地域住民の生活の場をアートで活性化することで、建築を含む地域の資源が再

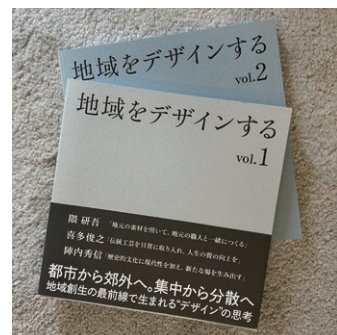
認識されています。来場者は開催初期の4,800人から、震災後の第3回には約35万人まで増加し、2007年からの8年間で約20億円の経済効果を創出(群馬経済研究所調べ)。さらに、ビエンナーレを開催しない中間年には、海外(モンゴル、ポーランド、台湾など)で展覧会を開催し国際交流を推進するほか、学校の授業にアーティストを招く鑑賞教育やアーティストスクールを実施し、地域教育にも貢献しています。

山重氏はアーティストと地域、双方にメリットがある仕組みを構築し、「まちが寛容になってきた」と話すように、アートが地域社会に与える影響力の高さを実証しています。

以上の3連続講演を総括するシンポジウムを開催予定です。地域創生の第一線で活躍する建築家、デザイナーをお招きした基調講演と連続講演会の登壇者の方々と交えたパネルディスカッションなど、有意義な会になるよう企画をしています。皆様、どうぞご参加ください。

当委員会の地域創生に関する活動を記録した単行本「地域をデザインする Vol.1, Vol.2」は以下のサイトから購入できます。是非、お手に取ってください。

(委員長 木村慶太)



日本建築美術工芸協会編  
『地域をデザインするVol.1』建築画報社(2021年)  
『地域をデザインするVol.2』建築画報社(2023年)



## 第2回AACA賞受賞作品視察会2025: ポーラ青山ビルディング/土浦亀城邸

会員交流委員会

開催日:2025年10月7日

視察先:ポーラ青山ビルディング/土浦亀城邸  
(東京・港区)

講師:安田幸一さん、安東直さん、鎌田裕樹さん、  
村井久美さん

会員交流委員会では、「第2回AACA賞受賞作品視察会2025」と銘打って、AACA賞2024受賞作品である「ポーラ青山ビルディング/土浦亀城邸 復原・移築」の視察会を10月7日に開催しました。

当日は講師として、建築設計監理を担当された安田アトリエの安田幸一さんと久米設計の安東直さん、鎌田裕樹さん、アート監修を担当されたTACプロパティの村井久美さんをお招きし、30名もの方にご参加頂きました。

ポーラ青山ビルディングは、その裏庭に土浦亀城邸を復原・移築するとともに、建築とアート、そして文化財をみごとに融合させたAACA賞にふさわしい都市環境を形成しています。SHIMURA bros(シムラブロス)によるアートは、1階に設置された2カ所のアートと5階の建物壁面から突き出したアート、窓面に描かれたアートの4点でひとつの世界観を創出しており、単純に建築にアートを置くということではなく、建築とアートが一体となった環境がみごとに実現されていました。最上階のテナント専有ラウンジから連続的につながる屋上庭園では、大山エンリコイサム氏による大壁画が青山の空と一体となった第二の地表面を創り出しています。このようにアートと建築の真の融合を実現するためには、設計初期段階からの準備と施工段階でのきめ細かな調整が前提となっており、事業者、設計者、アーティスト、施工者、そしてアート監修者の実現に向けた強い想いが結実したプロジェクトでした。

\*会報101号(2025年5月発行)の特集で、ポーラ青山ビルディングのアートについて詳細に解説しています。(P6-11)  
<https://www.aacajp.com/record/newsletter/pdf/No101.pdf>

目黒区上大崎から復原・移築された昭和を代表するモダニズム住宅である土浦亀城邸では、安田幸一さんから多くの貴重なお話をじっくり聞くことができました。玄関キャノピーを支える構造材を兼ねる中二階を介したスキップフロアの構

成は、設計者である土浦亀城氏が旧帝国ホテルの現場でのアルバイト経験と、その後のフランク・ロイド・ライト事務所で働いた経験の中でスキップフロアに対する強い憧れを抱き、自邸で展開したのではないかという話。横文彦氏は幼少の頃に土浦亀城邸を訪れ、その時の印象が建築家を目指すきっかけとなり、将来の青山のスパイラルでの空間構成に影響したらしいという話。2階の寝室では奥様の土浦信子氏が化粧台やクローゼットなど過半を占有され、亀城氏は手前のベッドのみ利用されていたようだという話。この住宅を巡る多くのエピソードに皆さん興味深く耳を傾けていました。また、90年前に建設された住宅にもかかわらず、

温水輻射暖房やシステムキッチン、ユニットバスの原型とも思われるバスルームなどもあり、見どころも満載でした。このような貴重なモダニズム建築が復原・移築できたことは、東京都の文化財保存に対する理解もあったと思いますが、奇跡と言ってもよいと思います。

視察会後の講師の方々を交えての懇親会においても、さらに多くの裏話をお聞きすることができました。会員交流委員会では今後も、設計者あるいはアーティストから直接話を聞くことができる、今回のような視察会を継続的に企画してまいります。どうぞご期待ください。

(担当理事 大草徹也)



ポーラ青山ビルロビー吹抜け越しに見た土浦邸



青山通りに面した建物外観 撮影:T. Morita



土浦邸前にて集合写真 撮影:T. Morita



## 建築美術工芸・よもやま話 [4] 魅力あるaacaになるには？

会員H & 会員K & 会員T

**T:**ど〜も。お久しぶり！

**K:**98号から「本物ってなに?」「アートって?」「AACA賞って?」って話した後ご無沙汰だったから、1年ぶりだね。

**H:**最近のトピックスといえば、昨年12月の設立記念総会で、「魅力ある協会になるための施策案」が示されたよね。

**K:**来年度に具体化するんだってね。aacaも変わろうとしてるのかな。

**T:**昔は「建築と美術の融合」っていうだけで新鮮だったけど、今は「サステナブル」「ウェルビーイング」が当たり前。変わらない理念を持ちながら、時代に応じて柔軟に進化することは必要だね。

**H:**aacaができた1980年代ってポストモダン全盛期だったんだよね。建築に遊び心や装飾性を取り入れる流れがあって、街が装飾過多で華やかになっていった。そんな時代に「文化的な空間をつくろう」という理念を掲げたのはすごく先進的だったと思う。機能性だけでなく人の感性を大事にする空間づくり。その発想が今も続いてるって、誇らしいことだよ。

**K:**aacaの会員の人が自慢できる団体になるといいな。建築での日本建築学会とかJIA(日本建築家協会)とかに並ぶくらいの知名度も欲しい。

**H:**あ、それについては、そもそもaacaはそういう団体とは種類が違う集まりって考えた方がいいと思う。学会、JIA、建築士会、美術だと日本美術家連盟とかは、単一・同一の専門家集団だね。同じ専門家だけで集まると、どうしても地位向上とか利権の話になる。でもaacaは利権とは無縁。むしろ異分野の人が集まって「文化的な空間をつくろう」という一点で繋がってる。懇親会で建築家と工芸作家が意気投合して、街づくりのアイデアが生まれるなんてこともある。こういう化学反応が起きるのがaacaの面白さなんだよ。  
**K:**なるほどね。でも街づくりするときにも様々な専門家が集まるよね。それとaacaとの違いはなんだろう。

**T:**街づくりチームは、具体的なピンポイントの街をよくするという目的を達成するために動いているけど、aacaはそれぞれの職能の人が街や空間にどう寄与できるかを考えている集団なんじゃない？

**H:**そうだね。それに単独ではなくて、建築、美術、工芸それぞれを知ること、新しい可能性も見出したり、とかね。

**K:**他分野の人が深く知ることはすごく意味があるよね。私はaacaに入ったことで、それまで遠い存在だった工芸の魅力を知って、空間への活用を考えるようになったよ。

**T:**僕は、懇親会で会った作家さんと意気投合して、その後、個展へ行ったりアトリエ行ったりして。そこでまたaacaの会員じゃない人と知り合ったりして、最近急速に今までになかった経験をしている。

**K:**異分野の人と深く知り合えるのは、aacaならではの魅力だよな。

**H:**その道のプロが集まってるから、他分野の話の聞いたり見せてもらうのは高度なレベルで楽しいね。自分の糧になるし、そのお陰で自分の幅が広がれば、結果的には僕と関係を結ぶ人にも還元されてると思う。社会へ還元、とまではいかないかもしれないけど、きっと意味はある。

**T:**真面目か！でもそうなんだよなあ。最近、仕事の間でも、建築と美術と工芸が融合するとどうなると思います？なんて話すようになって、話題も広がってるんだ。異分野協働って言葉だけ聞くと抽象的だけど、実際にやると面白いんだよ。建築家と美術家と一緒にデザインした広場とか、ランドスケープに工芸を組み込んだプロジェクトとか。こういう取り組みがもっと増えたら、街そのものがアートになると思う。

**K:**異分野との交流によるメリットは、コンパクトな組織だからこそ享受しやすいってところもあるよね。

**H:**そう、大きな組織では無理、無理。でも、そういう交流って、距離が離れていて

いる人同士では難しかったりするね。これはなんとか考えたいよね。

**K:**それに「自分から参加して動く人に機会が集まる」という側面もあるね。受け身だと得られるものが少ない。

**T:**そこを促すには、面白そうな「入口」を見せてあげるようにすれば、一歩が踏み出しやすいかも。

**H:**ニュースレターとかで「参加の入口」を見せてあげることはできそうだよな。

**T:**課題と言えば、若い人がもっと入会して、活躍できる場が欲しいよね。

**H:**それは不可欠。持続可能な組織にするには、世代の循環が必須。

**K:**よく「若い人が参加したい内容って何だろう」という話が出るけれど、今の若い人たちが自分たちで企画できることが大事じゃない？

**H:**主体性があると、自然と「盛り上げよう」「伝えよう」「人を誘おう」になる。

**T:**上の世代が用意した場でも、もちろん良い企画はあるけど、若手の目線からは興味を持ってないこともある。だから、若手がリードできる場を確保したいね。

**H:**これからの話は、これからの人たちでとなると、若い人で話し合ってもらえばいいんじゃない？

**T:**それなら、次のよもやま話に登場してもらったらどう？

**K:**賛成！でもaacaに若い人がいないんじゃない？

**T:**いいんだよ、会員じゃなくても。aacaのことを知っていて、問題意識を持って話せそうな人、探そうよ。

**K:**地方会員の参加アイデアの話もぜひ聞きたいよね。これも、よもやま話で対談してもらおう？

**H:**なんか、可能性が見えてきたね。とりあえずは、声掛けから始めようよ！

**T,K:**オッケー！魅力あるaacaへの第一歩だね！！

## 私思うaaca的空間

### 南禅寺水路閣

尾崎勝 建築家[個人会員]



2012年末に久しぶりに京都に入り、蹴上インクラインを見て、琵琶湖との舟運を繋ぐ明治期の物流革命に驚かされた後、南禅寺を訪れ、木立の奥に突然現れた琵琶湖水源の疏水革命に再び驚かされたのが、この「水路閣」である。

古代ローマの水道橋を思わせるモダンなレンガ積みのアーチと、そのアーチのすぐ奥の高台に建つ伝統建築の南禅院がまずは対比的に目に入る。と同時にその水路閣の高さは、琵琶湖との水位差、南禅院との起伏差を広狭域で調整したと思われ、木々の頂を越えない範囲に留めて圧迫感を抑えている。加えて19世紀末の明治期の輸入技術でありながら、腰高の細い橋脚とその桁部分のアーチ模様の彫刻的繊細さが周辺空間と柔らかく調和し、13世紀末の鎌倉期に創建された入母屋造りの深い庇に対して、両者の個性的な光と影の美学を共存させつつ共に樹影で包み込むという、その全てにおいて絶妙な「静けさ」の配慮が感じられた。

600年の時を超えた洋と和の対比は、今日でも起こり得る

異分野の交流であり、その挑戦を促した幅広い視野と構想力こそが、新旧相和して京都の町と人々の健康と文化を支え続ける礎となっている。ふと気づくと、土木ではあるが造形的な、外部ではあるが包み込むようなその空間の中に、人間味溢れる世界観の脈動を感じている自分がいた。

水と緑の大地に柔軟に寄り添う統合性、光・風・音にきめ細やかに寄り添う審美性、そして時代を超え分野を超えて人々に寄り添う精神性が、「静けさ」の中に際立つという、言わば建築・美術・工芸的感性の奥深い重層が、これからのパブリック空間への挑戦を含めた「aaca的空間」の一つの好例であると、今になって気づかされるのである。



### フレスコ画のある空間

大野彩 フレスコ画家[個人会員]



フレスコは建築に付随して部屋の壁面を装飾する技法です。画家一人で壁面に向かう時もありますが、チームを組んで制作するときもあります。よく知られた例を挙げればイタリア・ポンペイの住宅、ルネサンス期の各地の教会や礼拝堂など。現代ではジブリ美術館エントランスホールは、私たちのチームが造りました。

フレスコの技法は、額縁に入る絵と大きく異なる点があります。特に重要なのは下地となる左官です。砂と消石灰（以後、石灰と記載）とを練って壁に塗り付けますが、左官の知識と技術が重要になります。

左官壁の上に画家が筆を走らせ顔料を定着させていきます。他の画材と異なり、顔料の溶剤がなく、下地の強アルカリの石灰が顔料の粒子一つひとつを包み込んで壁に定着させるのです。大体、下地を塗ったその日のうちに壁の絵を仕上げます。このようにして作られた絵画は半永久的に、何年もかけて乾燥しながら壁の強度を増していきます。

日本の漆喰壁も同様ですが、石灰を使用した壁は呼吸するように、湿度を調整したり空気を清浄し、塗装による呼吸障害を起こすことも無く、理想の壁面と言えます。しかし、フレスコ壁は強度が出るまでに時間が掛かり、コストも掛かり、熟練された高度な技術が必要です。

建築素材はそれぞれの長所短所がありますが、それぞれを生かした空間を作るためには、素材を使いこなす技術や関係者の日々の努力が必要です。その営みの上になりたち出来上がった空間こそが、aacaとして期待される空間ではないでしょうか。



寶徳寺 武蔵遼遠 ©株式会社PAO設計



## 憲章

日本建築美術工芸協会は、故芦原義信氏が求めた文化的都市の創造を实践する為に、建築・美術・工芸に関わるあらゆる分野の人々が集まり、連携し、交流し文化と芸術性の追及と情報の発信を行い健康で文化的な空間創造に寄与する。

1. 優れた文化的な都市環境の創造を追求する。
2. 地域の環境と文化を尊重しさらに創造を求める。
3. 芸術文化の重要な担い手として社会の発展に努める。
4. 建築・美術・工芸が一体となった総合的な芸術空間を創るよう努める。
5. 文化的な空間創造のための「1パーセント運動」を提唱する。

## 理念

美しくゆとりある環境の街づくりを！

日本はこの60数十年、経済向上をめざして住宅から都市の建設にいたるまで、著しい発展を遂げて来ました。しかし、一方では市民にとって潤いを欠くような環境も多く見られるようになり、社会の文化育成という面を考えると実に憂慮すべき問題が生じてきています。

このことは未来に向けて空間創造に関係する私どもにとって、十二分の配慮が払われねばならないことであります。

まず、そのために建築に関わる美術、工芸、並びにその製作を支える人びとが連帯し、交流の場をつくり、社会のニーズに応えるよう文化と芸術性の考究と関連情報の収集・利用を促進し、さらに海外との情報交流をはかることが求められております。

aaca|2026.01|no.103

発行日:  
2026年1月30日  
発行:  
一般社団法人 日本建築美術工芸協会  
〒108-0014  
東京都港区芝5-26-20 建築会館6F  
TEL 03-3457-7998  
FAX 03-3457-1598  
URL <http://www.aacajp.com>  
E-Mail [info@aacajp.com](mailto:info@aacajp.com)  
編集:  
広報委員会  
委員長・編集長 勝山里美  
副委員長 中村弘子  
委員 金原京子 齋藤潮美 竹生田正  
津下庄一 森田高年 山崎和子  
山本茂義  
2-3ページ記事執筆:  
吉原佐也香  
表紙・フォーマットデザイン:  
矢萩喜從郎

## 表紙に向き合うと

この写真は、19世紀後半にグラスゴーで生まれた建築家、デザイナー、画家のチャールズ・レニー・マッキントッシュが設計したヒルハウス(1901-04年)の門扉。アール・ヌーヴォーは、曲線的な造形が主流だったが、マッキントッシュの装飾は、線を多用した造形を用いていた。ハーバート・マックニー、後にマッキントッシュの妻となるマーガレット・マクドナルド、その妹のフランセス・マクドナルドと共に「四人組」と呼ばれ、またその造形は「グラスゴー・スタイル」とも呼ばれた。1896年にロンドンで開催された「アーツ&クラフツ展」に「四人組」が招待出品を依頼され出品したのだが、予想以上に不評で、グラスゴーの動きそのものが、ウィリアム・モリス等が幅を利かせていたロンドンの人達には敬遠されていたのである。ところが、捨てる神あれば拾う神ありで、「四人組」が、月刊美術雑誌『ステューディオ』(*The Studio* / 1893年4月創刊)の編集長グリーソン・ホワイトの目に留まり、その雑誌の紹介でヨーロッパでの活路を見出すことができたのだ。ウィーンでは、第8回ウィーン分離派展に呼ばれ一室を与えられて展覧会を開催できたことを初めてとして、「グラスゴー・スタイル」の名が確立している。わたしがマッキントッシュの造形が何故こうも通じているのかと思う一つは、ウィーン分離派(セセッション)を代表するコロマン・モーザーの椅子であり、他にも、多くの共通性を拾えることである。

(矢萩喜從郎)





# 地図に残る仕事。®



大成建設グループ

大成建設 大成ロテック 大成有楽不動産 ピーエス・コンストラクション 大成ユーレック 大成設備  
成和リニューアルワークス 大成有楽不動産販売 大成建設ハウジング 佐藤秀 大成建設ICTソリューションズ 他



建築に、  
温度を。

Architectural Design  
with Passion

梓設計本社 HANEDA SKY CAMPUS



AZUSA SEKKEI

<https://www.azusasekkei.co.jp>





 三菱地所設計  
Mitsubishi Jisho Design

[www.mjd.co.jp](http://www.mjd.co.jp)

**AXS**

株式会社  
**佐藤総合計画**

代表取締役社長 鉾岩 崇

[axscom.jp](http://axscom.jp)



AXS SATOW INC.



